

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十六卷「社会科学（一の六）」

社会、国民生活（二）

自然災害、人災、交通事故、原発事故、医療事故

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十六巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、自然災害、人災、交通事故、原発事故、医療事故等に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 震災

第二部 震災のとらえ方

第三部 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について

第一章 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について（その一）

第二章 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について（その二）

第四部 今後の日本史の教科書に書いてほしいこと「東北縄文

時代から東日本大震災へ」

第五部 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵

興の鍵

第一章 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵（その一）

第二章 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵（その二）

復興の鍵（その二）

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 震災

二〇一一年三月十二日 起筆、攔筆、公開

皆様のご無事を祈ります。

第二部 震災のとらえ方

二〇一一年六月十三日 起筆、攔筆、公開

このところ、当サイトの交流会を色々やっている。この週末は、二日間で短い交流会を三回おこなった。

共感覚・鬱・発達障害・強迫性障害・離人症・解離性遁走・解離性同一性障害・統合失調症・人見知り・絶対音感の話などをしていく。それぞれのメンバーが必ず上記のどれかを持っている。書きたいことはたくさんあるが、一つだけ。

以下は、参加者たちが、普段周りの人たちからは理解されないと訴えるのに、この交流会ではみんな同意し合った言葉である。

「今回の震災が起こって、なぜ心が楽になった」

「震災が起こってから一般の日本国民が言い始めた格言的な内容（命は大切だ、など）は、普段から私たちが考えていたことだ」

「震災が起こってから、なんだか一般の人たちも苦しんでいて、みんなが同じ地上に降りてきた」

私も、「それはよく分かる」と答えた。

精神科医の斎藤環氏は、95年の阪神大震災発生直後に、率先して外出して人助けに当たったのが、それまで家から出なかった鬱病や引きこもりの人たちであったことを指摘している。（ただし、普段私は、斎藤氏の精神病理観の全てに賛同しているわけではないのだが。）

今回の東日本大震災でも、まず最初に騒いだり、パニックになったり、東電に対して恫喝・非難したのが、本当にそれまでごく普通に会社に行くことができていた人々に違いがないということは、普段から共感覚や発達障害、精神疾患などの特殊な事態に生きている人たちにとっては、わりと容易に想像がつくものなのだと思う。

ある方は、それまで統合失調症だと診断されてきた患者が、一転して、震災でうろたえていた健常者の日常生活を手助けした例を教えて下さった。自分たちのように心の病気になる前に、バリバリと会社員ができるくらいだから、ものすごい精神力を持っているのかと思いきや、なぜ自然災害ではそういう人から順番に倒れて寝込んでいくのか、不思議でたまらない、と述べていた。

姉が会社の正社員で、妹が解離性障害で何年も闘ってきた、姉妹

のお母様からも、同様のメールを頂いた。

「このたびの震災で、妹は心が穏やかになったと訴えます。姉は、自分の会社がつぶれることを心配して機嫌が悪いです。姉のほうをどうにかして下さい。妹は、周りの人たちがなぜか私の目線に降りてきた、と言います。どういう意味でしょうか」

これについては、「これでやっと、今まで妹をいじめていたお姉さんは、妹の心を理解していくと思います。どちらも褒めてあげて下さい」と答えておいた。私は精神科医でもカウンセラーでもないし、これしか答えてはいけない気がした。

人間の心の問題や命の問題、そして人間が先験的に体得しているべきアフォーリズム（命は大切だ、自然は偉大だ、など）に、人生上の大事件が起こってから気づく人と、起こる前から考えている人と、両者が併存しているのが現代日本社会なのだ、改めて思う。

「仕事での表面上の苦勞」と「自己の存在の苦惱」とを比べて、普段前者を「人間の苦勞」だと思っ生きてるか、または前者しか脳が認識していない状態に生きてると、大災害などが起こった時に、まずはそういう人から先に急性症状を呈して倒れていくという現実、かなり滑稽ではあるけれども、笑って済ませられるような話ではないと思う。

ただし、「震災で心が楽になったなどは、なんと不謹慎なことを言うのか！」と言われないために、言い方には気をつけなければ

ならないという議論、そして、どういう言い方をするのが適切かという議論もした。なぜなら、言い方には気をつけなければならないけれども、言わなければならない大切なことである気がするからだ。

### 第三部 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について

#### 第一章 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について（その一）

二〇一一年七月二十二日 起筆、攔筆、公開



岩手県出身だった宮沢賢治によれば、「人間はどうしても、他の生き物を殺して食べたり大自然に手をかけて生きていかなければ仕方がないが、同じく、人間が他の生き物に殺され食べられたり自然災害に襲われたりしたならば、拒んではならない」という。

しかも、いわゆる動植物・生命体だけではなく、自然災害でさえ、生命性と必然性を持って襲って来るとして、それを「宇宙意志」と名付けている。

賢治としては、自身の世界観を一応は西洋の一神教的な「神」から区別し、自ら信奉する法華経的世界観に用語と概念を合わせようという意図があったらしく、それで「宇宙意志」などと名付けたようだ。（ただし、『銀河鉄道の夜』に見られるように、賢治の言う「宇宙意志」はキリスト教的真理と必ずしも明確に区別されているわけではない。）

ともかく、おそらく宮沢賢治は、もし今も生きていて今回の東日本大震災に遭ったとしても、全く同じことを主張した人だという気がする。

私にも、東北地方の東海岸在住の友人・知人が数人いるが、震災直後から、だいたい宮沢賢治と似通ったことをメールしてくる人が多い。もちろん、全ての友人が「東北の復興は良いことだと思うけれど」と前置きはした上での話であるけれども、中には震災を明確に「仕方ない」、「やむをえない」という表現で書いて送ってきた人もいた。

「類が友を呼んだ」と言えばそうかもしれないが、私としては、こういう友人・知人を持って心から幸せだと思った。私が部外者として東京から展開した論ではなく、最も大きく被害を受けた東北の人たちの一部が述べている内容だということに、個人的な興味がある。その意味では、少なくとも私個人としては、東京から東北地方の

様子を見つめていると、「未被災者と被災者の心の温度差」に加えて、「同じ東北の被災者の中での心の温度差」という、二重の温度差を感じる。むしろ私は、後者のほうに興味がある。

あるいは、地震から四か月が経って、首都圏にも電力不足や放射性物質の影響が押し寄せ、実質的に被災地の生活苦との落差がだんだんとフラットになってきた今、むしろ後者の温度差のほうが大きいのではないかと思われる。

実際のところ、ここ最近では、テレビ・ラジオなどを見聞きしていると、被災者の口から「ウチの家（町）はこんなに被害を受けているのに、あの家（町）はもう直りかけている」などといった嫌味なニュアンスの発言がポロポロと聞かれるようになってきた。人間はそういう生き物なのだと思ってしまう。

そこで思い出したのが、事あるごとに言葉遣いを批判される石原都知事の発言である。石原氏は、今回の震災を「日本人の我欲」に対する「天罰」だと主張した。

ただし、震災を「天罰」だと言った人は、何も石原氏が初めてではなく、むしろ関東大震災の時の日本の有識者のほうが厳しくそれを主張しており、武者小路実篤、芥川龍之介、北原白秋など、名だたる文豪が関東大震災について「天譴」（てんけん。天罰のこと）だと述べている。当時は主に、「西洋列強のマネ事ばかりしてきた我々日本人への天譴である。我々は猛省すべきである」という文脈の中で使われている。

さらにさかのぼると、この「天は意志を持っており、天変地異を

起こして人間を忠告する」という考え方は、中国の儒教が源泉で、「天人相関説」や「災異説」と呼ばれた。もともと、日本人（縄文人）にその心が無かったというのではなく、日本人はそれを漢民族のように体系的に「ナントカ説」と名付けなかっただけの話で、今でもそのような宇宙観を残している原住民は世界にいるようである。

それはともかく、私が石原氏の「天罰」という言い方をよろしくないとする理由は、「罰を受ける必要のない子どもたちまで津波にさらわれたから」という以上に、「氏が都知事という現代主権国家の事実上の首都の首長だから」なのだが、その罰を受ける必要のない子どもたちが津波にさらわれたという点では、その子どもたちを吊って涙を流すほか「やむをえない」とは言える。

裁判の判決には「判例」という「先例」があるが、日本語の使い方にも「先例」というのはあるのだろうか。かつて昭和天皇は、原爆投下を「やむをえない」と仰せられたのだった。

「天皇に絶望した」という言葉が広島市民を中心に明確に巷で聞かれたのは、おそらく日本史上このときが初めてだった。1975年、私が生まれる1年前のことである。それこそ宮沢賢治の心酔した日蓮宗をはじめ、仏教界でも「原爆投下は仏罰である」とする「仏罰論」もあつた時代である。しかし、天皇が「やむをえない」と仰せになるとは、広島市民も思わなかったようである。

人為的暴力に対して昭和天皇がお使いになつた先例のある「やむをえない」という言葉や、文学者や仏教者が使用した先例のある「天譴」や「仏罰」という言葉を、今、東日本大震災という自然災害に

対して一般国民の我々が使つたところで、もはや言葉遣いなど大きな問題ではないのかもしれない。

ただし、それを踏まえても、やはり冒頭の宮沢賢治の自然観は、優しさと厳しさの両方に溢れた、最も適切な考え方だと思ふ。

私も、地震や台風などの発生いかにかわりなく、今までの30年弱の日々を、宮沢賢治と同じような自然観を持って生きてきたつもりである。だから、自ら被災しながらも、強硬な東北復興推進モードに切り替わっていく周囲の被災者の国・自治体の心理や自然観に疑念の目を向けている友人・知人からのメールが、なぜか心に嬉しく響くのであつた。

「被災者を支援しなければならぬと思う心」と、「あの一東北人であつた宮沢賢治の言つたことを素直に受け入れる今の被災者がどれだけいるだろうか」と疑う心とは、両方とも持つていて良いと思ふ。

私はその意味では、申し訳ない気もするものの、テレビに映る被災者よりも、まずは自分と直接的に接している身近な被災者の心の動きを重点的に見つめていこうと思ふ。

宮沢賢治の言つたことには、日本人が忘れてはならない心がある。と、私は思うのである。日本人の一人に宮沢賢治がいたというよりは、宮沢賢治的な生き方をすることが本当の日本人であるという気がする。

続く。



二〇一一年七月二十四日 起筆、攔筆、公開

## 第二章 東日本大震災と宮沢賢治の自然観について（その二）

■関連ブログ記事  
震災のとらえ方  
<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/45972333.html>  
(二〇一八年七月十二日に追記：現在は『全集』に収録。)

■画像出典

宮沢賢治 (Wikipedia)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A%B6%B2%E8%B3%A2%E6%B2%BB>

続き。

前回の「その一」の記事では、宮沢賢治の言う「宇宙意志」について書いた。

そこで書いてみたのは、賢治という人は、「動物の一種としての人間が、必要最低限の動植物を自然から採って食べる代わりに、他の動物に殺されて食われたり自然災害に巻き込まれたりすることを同程度に受け入れる社会」を「理想の社会」と見なしていた、というところだった。「宇宙意志」に基づいて賢治が作ろうとした理想郷岩手「イーハトーブ」や理想郷仙台「センドード」は、そのような社会だった。

だから、私は、例えば「宮沢賢治は菜食主義者だった」という説も本当は怪しいと思っている。実際に賢治は、生物を動物と植物とに分類して「植物を食って動物を食わず」とする「菜食主義」、「人間による動物への同情」や「人間の健康推進のための菜食主義」を、作品中で批判している。『『ビジテリアン大祭』など。』

自然破壊が世界規模になり始めた現在では、「持続可能な開発」、「宇宙船地球号」、「ロハス (LOHAS)」といった言葉が盛んに叫ばれるようになり、日本政府もこれらの用語を掲げるようになった。

これらは、「人間を含めた大自然・動植物が未来まで対等に共存できること」ではなく、「今生きている我々人間が資源を有効活用して営利活動を興し、未来の子どもたちに残す利益を長引かせること」を意図したマーケティング用語・ビジネス用語として生じたもので

あった。

すなわち、「未来の人間を含めた自然の生態系に迷惑をかけないこと」ではなく、「未来の人間に迷惑をかけないように、自然の生態系を整え、利用すること」を主眼に掲げている点で、宮沢賢治の言う「宇宙意志」による理想郷思想とは異なっていることに注意する必要があると思う。

私が思うに、「持続が不可能な自然破壊社会」を回避するには、おおまかに二つの方法がある。一つは、「自然破壊のスピードを上回る形でいっそう文明のスピードを上げて先回りし、発展した科学技術によって自然破壊を抑え込む」方法。もう一つは、「文明のスピードを落とし、自然破壊そのものを抑えることで、社会を持続させる」方法。

賢治は、後者、すなわち「文明のスピード自体を抑えて、伝統的日本の第一次産業（農・林・魚業）を重視する方向」での「持続可能な社会」を夢見た人だと言える。

私自身も、後者の方法以外に日本や人類社会が生き残る道は本当はないと感じる立場の人だと思う。しかし現実の私は、とりあえず目先の仕事を終わらせ、大自然ではなく人に迷惑をかけないために、電車やパソコンやATM機器という文明の利器を駆使して、スピーディーな現代生活を送ってしまっているわけである。

ジブリ映画「もののけ姫」では、動物界（少女サン・動物たち・神々たち）と人間界（自然を破壊する人間）との壮絶な戦闘が描かれている。歴史学者らの分析や宮崎駿監督の発言などによれば、室

町後期・戦国時代前後の自然風景（植生や食物など）が描かれているらしい。

映画のことであるし、両者を対置させて、タタラの民の自然破壊性や戦いのシーンを大げさに描いているのは、おそらく現代日本人への警鐘のためなのだと思う。描かれている日本人は、「当時の日本人の実際の姿」というよりは「現代日本人の生き写し」なのだろう。

ともかく、映画の最後で人々は、大自然と動物・神々たちの力によってねじ伏せられてしまい、一からやり直そうという心に戻る。前近代までの日本では、国土が持続可能であり、少し人間の身勝手が上回ってもすぐに自然の力に抑え込まれ、人間が「持続可能性の大切さ」に自覚的であることができたのだろう。

一方で、現在の日本・欧米・中国を見てみると、現在の大気汚染や森林破壊や放射線拡散のスピードのままでは、「社会が持続可能でない」ことは明らかだが、それを回避するために選ぶようとしている方法は、ほとんどが先に書いた前者の方法であるように思う。

今回の震災への対応でも、国や自治体を選んでいる方法は、ほとんどそれであると言ってしまうと思う。先の「ロハス」などのエコロジー用語も、前者の方法を意識して生まれた。この特質は、欧米ではもっと分かりやすい形で表れており、例えば、歴史的な古建築と自然の保護団体であるナショナル・トラストが、一方で人類の手による宇宙開発を推進していることにも表れていると思う。

私は正直なところ（自分をひねくれ者かとも思うが）、本当は「世界遺産」という概念も、本質的には同じ問題を露呈するかもしれない



いと思っっている。小笠原諸島や平泉が世界遺産として世界の目に触れることになったという事は、瀬戸内海や宮城野の原が世界遺産ではないことが世界の目に触れることになったということである。

世界遺産という概念が日本に適用されたことで明確になった「世界遺産でない日本の残余自然」の存在は、日本の企業や外資系企業に「日本の自然の価値の欧米基準化と相対劣化」を意識させて、かえって日本列島は自然破壊と営利的利用の対象となっていくと思う。宮沢賢治なら、イデオロギーとしての「菜食主義」を批判したように、イデオロギーとしての「世界遺産」も批判しただろうと思う。

今となつては仕方ないことだが、私は本心では、日本人は、「我々日本人は古来より、いわば日本列島全体の生態系を我々の友と見ながら生活をしてきた。世界遺産という手には乗らない。あるいは、日本にいる犬・猫・虫まで一匹残らず世界遺産にする以外に我々の自然観はない」というくらいの気概を持って生きてみて良かったと思っっている。

そのような日本的・宮沢賢治的な自然観を、二十一世紀をかけて世界に輸出する手もあったかもしれないと思っっている。

ただし、これからの日本はその道を選ばず、欧米を中心に構成された世界基準に日本の自然を乗せていく道を選んだということだと個人的には悲観的に寂しく理解している。それは、西行が詠んだ「あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原」の心を日本人が自分たちの力で考えることをやめた、ということでもあると思っう。

しかし、「今、震災で我々は大変なのだから、小笠原や中尊寺をそちらの都合で議論してくれるのはちょっと待て」と世界に向けて言えるくらいの文化的発言力を持つことが日本の理想の姿だと、個人的には今でも思っっている。

#### ■関連ブログ記事

震災のとらえ方

<https://wasakijunichi.net/iwasaki-j/blog/45972333.html>

(二〇一八年七月十二日に追記：現在は『全集』に収録)

#### ■画像出典

宮沢賢治 (Wikipedia)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A%B2%A2%E8%B3%A2%E6%B2%BB>

#### 第四部 今後の日本史の教科書に書いてほしいこと「東北縄文時代から東日本大震災へ」

代から東日本大震災へ」

二〇一一年七月三十一日 起筆、擱筆、公開



縄文時代の日本列島の人口や人口分布を見ると、気候の変動にありのままに左右されて、およそ10万人から二十六万人の間で推移し、そのほとんどが東北・関東地方に集中している。

二十六万人と言うと、だいたい現在の山形市または仙台市青葉区の人口が、数十人から数百人ずつの群れを成して日本列島に広がっている状況と言える。それまでは三千人ほどで旧石器時代を頑張っていたわけである。

縄文時代の人口の多くが東北・関東地方に集中していたのは、木の実を落とす落葉広葉樹林が豊かだったからだ。西日本は、ほとんど木の実を落とさない照葉樹林のもとの「動物だけの王国」である。縄文時代後半（中期・後期・晩期）は、照葉樹林に南から押さ

れて関東地方の人口までもが東北に流入し、ほとんど「東北縄文時代」となる。

人口の増減の仕方は、サルなど他の哺乳動物の個体数の増減の仕方と変わりなかった。つまりは、人間もまた動物であった。

「縄文という時代があった」と言うよりは、「当時暮らしていた多くの動物たちのうち、現代の我々と同じ遺伝子を持つ動物種を、いつからか我々自身を取り出して縄文人と名付け、歴史の中に組み入れたにすぎない」と言った方が歴史に忠実であることになる。ナウマンゾウやオオツノジカが滅び、そこに別の哺乳動物である縄文人がやっと半定住するようになったにすぎないと言える。

（「日本人は縄文時代から世界的に見ても先進的民族で、神代文字などの文字も発明していた」という論調も巷で見られるが、個人的には、「進んでいる」か「遅れている」かという判断は「文明史観」であって「日本論」ではないと感じるので、どうしても関わりを避けたいと思ってしまう。）

その頃の北海道はアイヌの世界だったが、「ヤマト民族」や「日本人」という概念もないのだから、「アイヌ民族」という概念もない。私は、こういう物の考え方（というよりは、「考え」というものを捨てた時に残る史実の甘受）を真の「日本論」や「保守思想」と呼ぶのだと考える。

「ヤマト民族」と「アイヌ」の違いは、暮らしていた地域の緯度と言葉の違いであり、「人」という意味の「アイヌ」を「ヤマト民族」が「アイヌ民族」と呼んでいる以上、今の日本人も「ヒト」という

ヤマトコトバで「ヒト民族」などと呼ばれる可能性があったことになる。要するに、縄文時代の「日本人」は、間違いなく「ヒト」であった。

しかも、縄文時代は一万三千年以上続いたのだから、その間に東北で地震が起こって木々が倒れたり、津波が来たりすれば、それらは全て「東日本大震災」であったことになる。ただし、縄文人は内陸の民であり、今のように津波で原発が壊れて放射性物質が出てくる代わりに、人間や動物がびっくりして転んだり、アニミズム的な神々に畏敬の念を覚えたりするにすぎない。

ひよっとしたら、それまで高く採れなかった木の実が落っこちてきて子どものカゴに入り、堅穴住居で待つお母さんの元へ喜び勇んで帰るような「ケガの功名」もあったかもしれない。笑う人がいるかもしれないけれども、ともかく縄文時代とは、そのような「東北地方の内陸の落葉広葉樹林の時代」であったと言える。

その後、それまで劣勢だった西の縄文人たちの間で稲作が普及して定住生活が一般化し、そのうち弥生人との混血が進み、この頃を弥生時代と呼び、その中で大きなムラが自然発生的にヤマト政権となつて、やがて（記録として確認できる限り）天武朝において「日本」という国号が生まれ、人口も増えていった。ただし、東北地方は、少なくとも平安時代に至っても縄文新石器時代を脱しておらず、住居も縄文・弥生式そのままの堅穴住居が主に展開されていた。

「歴史」という概念がなく、自然災害の際には何のためらいもなくムラごと放棄して自然に放り返してみたり、魚を採って食べた後に

その魚のために建てた江戸時代の墓が残っていたりすると見ると、東北の人々はつい近世まで、私の前二回分の記事に挙げた宮沢賢治の「宇宙意志」に自動的に従って「イーハトーブ」や「センドード」を営んでいたのかもしれない。

前回の記事に書いた「持続が不可能な社会」に真つ先に陥る可能性があったはずの大会平安京でさえ、元より湿地帯である右京のほうから自然の植生が侵入してくるものだから、早々とそれ以上の開発を諦めて左京に押し込められ、最後は半分の規模になっている。

本当は、今回の震災で話題になった「これより下に家を建てるな」という先人の石柱も、その自然観の延長の上にあると思うのである。元復興担当大臣が「知恵を出さないヤツは助けない」と東北に向けて言つて辞任したが、石柱を立ててそのちようど下で津波をピタリと止めて見せた先人の知恵は、大臣顔負けの見事な知恵だったということになる。

津波を避けて建てた少し高台の家を出て、奥羽山脈の冷たい北風（きたおろし）を背に受けながら海へ向かい漁に出たり、三陸沖から吹いてくる山背（やませ）と闘いながら少し内陸に田畑を広げたりするからこそ、縄文時代以来の東北の味が出るところを、今回の国や東北の自治体のように、再び海沿いにガチガチにコンクリートで固めようとしても、おそらく結果は同じことで、またそれを超える災害はいつか訪れるはずなのである。

それは、せっかく積み上げた東北縄文魂と東北の生態系を、たった一発の地震で再び失うことを意味してしまうと思う。過去に何回

もあつたはずの「東日本大震災」のうち、今回のそれは、東北の存亡と日本人の心を問われる「人災」の様相を呈している。

日本列島に人間が住み着いてから現在までのうち、「国と自治体が原発を建設し、それを崩壊させたまでの時期」は、単純計算でも、日本列島史の最後のほんの〇・一パーセントの時期の出来事である。

私は、それをそのまま、これからの日本の小中学校の教科書に正直に書いてほしいと思つている。「縄文・弥生時代を基盤に日本という概念が生まれていく日本列島全体の自然界の律動」から「これより下に家を建てるなど書いた石柱を立てた先人漁師の知恵」への連続性と、現代日本人がおこなつてきた色々な功罪とがよく分かるように、日本史の教科書を書いてほしいということである。

その中で、「東北の民が落葉広葉樹林の恩恵を受けて一万三千年に渡り育んできた縄文魂がなかったら、日本全体が存在しなかった」事実を子どもたちに伝えていくことが、大人の責務だと思つた。

私はそういう意味で、「日本」という概念は、今の我々が思うような「近代的主権を持つ国民たる日本人」という人類が作り上げたのではなく、日本列島に存在した原住民である縄文人や渡来人を中心とする弥生人の遺伝子を受け継いだ人間と、虫や桜をはじめとする動植物たちと、月をはじめとする天象たち皆の力によって立ち上がつてきた、自然現象としての農耕文化ではないかとさえ思つている。

と言うより、本当はどの先住民族社会でも似たところがあるし、そもそも、「かつての日本人のような自然観は日本に限らない」というのは賢治の考えでもあつた。

この「日本人の心のうちに全宇宙・全世界・全東洋を見る。これをもつて西洋列強の帝国植民地主義に対抗する」という思想は、うまく使えば賢治のように美しく優しい「芸術」になる。ところが、下手に人にしゃべると、当初の本人の理想とは違った形で勝手に利用される。

まさにそのような形で利用されたのが、山形県出身で賢治と同世代、同じ法華経的理想郷思想の持ち主で、満州事変の首謀者と目される石原莞爾の「芸術」である。彼は、賢治が日本に取り戻そうとした「イーハトーブ」や「センドード」の夢を、「五族協和」と「王道楽土」の満州国に見た。

賢治と石原莞爾の書き物や発言の字面を追つただけでは、一見すると、いったい、どちらが子どもに愛される文豪で、どちらが満州事変の思想的指導者なのか、さっぱり分からなくて驚く。違うのは、理想郷の場所が自分の土地だったか他人（満州民族）の土地だったかという一点である。

つまりは、それだけ宇宙観が似ているということで、逆に言えば、戦争遂行のために宮沢賢治も軍部に利用されたふしがある点では、二人の運命は似たようなものかもしれない。

それにしても、今回の震災は、本当に日本の固有の（つまり、私の言いたいところでは、東北縄文人と東北の動植物たちの「万年来の共有の宝として固有の」東北地方で、宮沢賢治的な方向性での理想郷を造るチャンスという見方もできると思つた。

私の個人的な日本観はそういうものなので、私が著書などで「日

本」と書いているとき、今の政体としての主権国家日本を指しているのではなく、東北の縄文精神と西南の弥生精神とを融合的に引き継いだ、連続とした家族的生態系としての日本列島全てを指しているつもりである。

おそらく、法華経的「宇宙意志」による理想郷を夢見た宮沢賢治は、今回の東日本大震災を見たとしたら、その半分は日本人自身が日本人の自然観に従わなかったことで起きた人災だと言うと思う。

もっとも、縄文人の自然観や賢治のような歴史観は、今から震災を乗り越え、今まで以上に強靱な鉄壁のコンクリートと人為的な居住区域計画をもって復興に向かおうとしている東北の自治体にとっては、好都合ではないかもしれない。しかし、現代の東北地方の人たちだけを鉄のカーテンで守っても仕方がなくて、賢治の言う通り、数万年単位の東北の生態系を守らなければならないと思う。

ともかく私としては、まだ日本という国号も生まれていなかった日本の原点の中の原点である縄文時代そのものが、まさに今震災に遭っている東北地方の土着魂によって成り立っていたという事実を噛みしめて、今回の震災と向き合っていきたいと思う。

#### ■関連ブログ記事

「東日本大震災と宮沢賢治の自然観について」

(その一)

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/46752749.html>

(その二)

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/46935386.html>  
(二〇一八年七月十二日に追記：現在は『全集』に収録。)

#### ■データ参照

『人口で見る日本史』 鬼頭宏

『人口から読む日本の歴史』 鬼頭宏

『縄文時代』 小山修三

『縄文探検』 小山修三

『「邪馬台国」人口論』 安本美典

[http://nng.nikkei.jp.co.jp/nng/sp/7bilion/1106\\_02\\_1.shtml](http://nng.nikkei.jp.co.jp/nng/sp/7bilion/1106_02_1.shtml)

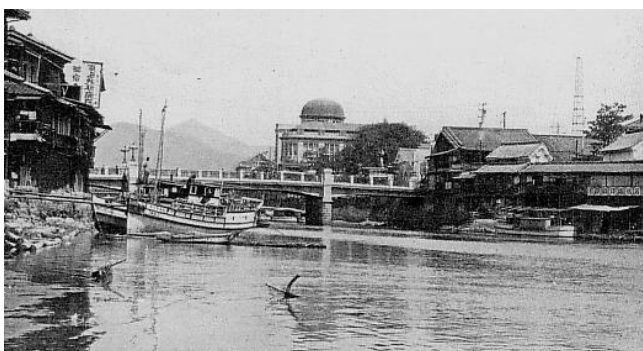
#### ■画像出典

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB%E7%AB%AA%E7%A9%B4%E5%BC%8F%E4%BD%8F%E5%B1%85.JPG>

### 第五部 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵

#### 第一章 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵 (その一)

二〇二一年八月六日 起筆、擱筆、公開



今は少し下火だが、以前は廃墟ブーム全盛の時期があった。

戦後を通じて、日本軍施設跡などを中心にブームはあったのだから、二〇〇〇年あたりから急に廃墟関連番組が増えたり、「廃墟マニア」という言葉が聞かれたり、『廃墟の歩き方』（栗原亨、イーストプレス、二〇〇二・二〇〇三）という本まで出たりした。放置され

た人工建築（学校・鉄道・駅・炭鉱など）から、自然災害や戦争に襲われて保存された歴史的建築（原爆ドームなど）まで、様々な人工建造物がブームの対象となった。

写真愛好家、鉄道マニア、昭和・大正レトロ趣味愛好家、心霊系趣味愛好家、歴史学者など、あらゆる人が「廃墟」に惹かれてきた。

本日、広島への原爆投下六十六年目を迎えた中、福島第一原発から放射性物質は漏れ続けており、皮肉なことに、「廃校」「廃線」「廃坑」などと共に、「廃炉」も「廃墟」の仲間入りを果たす未来がやって来るようになった我が国である。

ともかく、このブーム一つを取っても、「廃墟」や「殺風景」や「残骸」というものに対して、否定的感情だけでなく、ある一定の肯定的デカダン（退廃美）趣味を抱いている人の層が、今でも日本人の一部にだけのことではなくよく見て取れる。これについて、東日本大震災との関連で、もう少し考察を深めたい。私は、この「廃墟ブーム」に震災復興のヒントを見つつ、一点だけ注文を付けてみたいと思う。考えてみれば、今の東北沿岸の被災地域には、市町村まるごと廃墟と化したところがあり、地域によっては、その廃墟さえ残らないほど建物が津波に持って行かれ、荒野と化しているわけである。

違法に足を踏み入れている一部の写真家などもいるようだが、上記の多くの良識あるマニアたちは、東北新幹線などが復旧した今も、まだ「レジャーとしての廃墟」目的では震災跡を訪れていないと思う。多くの人が亡くなっていて気が引け、娯楽やスリルを感じていない場合ではないし、被災地支援者などの迷惑になるから、という、

極めてまっとうな理由なのだと思う。

それにしても、考えてみれば、「現代の人間の死に対する良識や倫理的態度」が「動植物や大自然にとってふさわしい態度」とは限らない場合があるのも事実である。あるいは、大自然が傷を負ったなら、巡り巡って、そこから農作物を得ている我々人間の生活も傷を負うのだから、前者の「良識」自体が曲った幻想である場合があると思う。

元より、東北の被災地域であろうが、既存ブームの廃墟の周辺であろうが、全く同じように「動植物の生死」、「大自然の営み」があるはずである。

人工的な廃校や廃線を放置したままにし、さらに廃墟マニアや観光客がそこに足を踏み入れたがゆえに、動植物などの生態系に悪影響が出たケースもある上、廃墟のアスベスト問題などは今も未調査のまま放置されている。

人間レベルでなく、大自然レベルで考えれば、原発問題以前に、これまでに人間が大自然に対しておこなってきた廃墟の放置と廃墟ブームそれ自体が、東北の被災地域の他人の廃屋に土足で上がり込むのと同じ行為であったかもしれない、という見方もできてしまうと思う。

それは皮肉にも、チェルノブイリの事故のあと、周辺に人間がいなくなった途端に、事故以前よりもっと豊かな動植物種を有する生態系がそこに戻ってきた滑稽な現実似ている。今の東北の被災地域の荒野について、動植物たちは、「震災がなければ原発を増設す

るおそれのあった人間という動物が去って、全てがリセットされ、良き大自然が前戻ってきたのだ」と言うかもしれない。

我々現代日本人は、それに対する説得力のある反論を持たないかもしれない。チェルノブイリほどの事故、廃墟さえ崩壊するほどの震災が起これなければ、我々人間は「大自然に過剰に足を踏み入れることをやめない」生き物だと言える。

その意味で、昨今の日本の廃墟ブームは、いわば「人間中心主義的廃墟ブーム」と言えるのだろう。「人間の死の匂いの有無」によって、廃墟の意味が変化している。

今の廃墟ブームにとって、当該の「廃墟」及びそれを包み込む周りの心象風景に「人間の死の匂い」を直接的に感じないことが、重要な要素であるのだろう。

大自然・生態系が壊れるおそれがあったとしても、人間の死の匂いのない単なる廃校や廃墟ホテルなら、そこは我々人間にとって、レジャーとして足を踏み入れるべき「良き」廃墟となってきた現実がある。原爆ドームとて、死の匂いが遠ざかったからこそ、「旅行の記念に」訪問できるとも言える。

今回の震災が「震災である」と言える理由も、地震と津波による結末に多くの「人間の死」と「人工建造物の崩壊」が含まれていたためであろう。前回三回分の記事で考察してきたことからしても、今回の震災が人間以外の動植物や生態系にとっても原理的に「震災」と言えるかどうかを疑う素直な心は、本当はとても温厚で重要な心だと私は考える。

あるいは、震災後に繰り広げられている「反原発」「脱原発」デモも、結局は「大自然のため」ではなく、「人間が困ったから」突如として起こした行動であるとも言える。

このように、一見すると上品な日本の美意識嗜好や昭和レトロ懐古趣味に映る「廃墟」ブームだけでも、廃墟に娯楽を感じるのも恐怖を感じるのも、いずれも「人間本位の視点での退廃美」の域を出ていない可能性を私は考えたのだった。

「過剰な廃墟ブームの抑止力」としてはたらく要素は、ほとんど「人間の死の直接的な匂い」のみとなり、「自然全体の調和」ではなくなつたと言えるのではないか。「反原発」デモも同じことで、人間本位の自己陶醉に陥らないようにしていく丁寧な作業も並行して必要だと私は思う。

そうなると、一部の日本人が残しているこのせつかくの「廃墟趣味」の範囲を、「人間の生死に直結しない安らかな廃墟」から「人間の生死を含めた生態系の移ろいを直接的に見つめさせる廃墟」へ広げること、すなわち「人間中心主義的廃墟趣味」を一度「大自然主義的廃墟趣味」の時代へ引き戻すことこそ、復興に必要なことだと私は思うのである。

続く。

■ 画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Motoyasu\\_Bridge\\_and\\_Hiroshima\\_Commercial\\_Museum.JPG](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Motoyasu_Bridge_and_Hiroshima_Commercial_Museum.JPG)

A4%E3%83%AB:Motoyasu\_Bridge\_and\_Hiroshima\_Commercial\_Museum.JPG

## 第二章 「秋の夕暮」的退廃美に見る「大自然本位」の震災復興の鍵（その二）

二〇一一年八月十七日 起筆、攔筆、公開





続き。

子どもの頃なら誰しも経験があると思いたいのだが、私は熱が出て学校を欠席し寝込んでいるとき、つらいはずでありながら、なぜかその中に一種の楽しさや爽快感を覚えたものだった。

その感情は、「熱が出たことで学校を休める」という単なる利得感情だけでは毛頭なく、いわば「これほど幼稚で未熟な自己であっても、確かに世界全体・宇宙全体に積極的にかかわっている」という、一種の墮落的・退廃的な喜びであった気がする。

そのような大げさな世界観を、母親が慌てて栄養のある料理を作ってくれている光景の中や、学校の先生と友人が自分を心配してくれているだろうという想像の中に、作り上げるわけである。そしてそれは、子どもにとっては現実の世界である。

子どもはしばしば、自然災害に対しても同じ姿勢で構えるように思う。今回のような大震災が起こったときに、元気を失わない子どもがいる原理も、それであろうと思う。

これは、『東日本大震災と宮沢賢治の自然観について（その一）』の記事にも挙げた、一部の被災者の「鬱が軽減される逆説的心境」とも通い合うと思う。その「鬱の軽減」の根拠は、やはり「人間本位の廃墟ブームの退廃美」よりは、「大自然本位の宮沢賢治的退廃美」のほうにあるのだろう。

「地震・津波が起きることは残念である」、「人間の死は絶対的不幸

である」、これらは皆、現代の大人の視点が作り上げた一種の暗黙の常識宣言にすぎないと思う。

子どもにとって、自然災害や震災や生き物の死滅の目撃は、「悲嘆のうちに秘めたウキウキ感」でもありうるし、「ワクワク感の同居する虚無」でもありうるし、「大人に勝利できる数少ない機会」でもありうる。しかし、今やこれは、ほぼ乳幼児の無意識の世界にのみ残された墮落と退廃ではなからうか。

藤原定家の有名な和歌に、「見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮」という歌がある。「あたりを見渡すと、華やかな春の桜も鮮やかな秋の紅葉もなかった。粗末な漁師小屋だけが残る海岸の秋の夕暮の風景に心打たれることだ」の意味である。「花」は慣例として「桜」のことだが、季節を秋に合わせるならば秋の花、例えば菊や萩や藤袴と解釈してもよいだろう。

ともかく、歌語「秋の夕暮」がある以上、和歌の慣例や常識として、「秋の夕暮」の寂れた殺風景の退廃美を褒め称えて詠まれた歌である。西洋絵画風に言えば、セピア色一色の世界である。定家は（もつと言えば当時の歌人たちは）、「花」や「もみぢ」も、「秋の夕暮」も、両方とも褒め称えたわけである。

私がいつも心の中で愛唱している和歌のうち、今回の地震・津波のあと最初に思い起こした歌がこれであった。今年の夏が終われば、まさにこの歌のような「秋の夕暮」、廃墟的・荒野的殺風景が東北地方沿岸に現出されることになる。

ここで仮にも、「桜の華やかさ」や「紅葉の鮮やかさ」を震災前の

東北沿岸地域の「原発誘致による好景気の栄華」や「地元の富裕な漁業関係者の大御殿」に喩え、「浦の苫屋の秋の夕暮のすばらしさ」を震災後の「現在の東北沿岸地域の悲劇的退廃美」に喩えることは、甚だ不謹慎なことだろう。だから、この私の比喩には、どこか「間違っている」箇所があるはずである。

ただし、その「間違っている箇所」がどこかということについて、私はこの歌をじつと眺めて考えた。どうも下句の比喩ではなく、上句の比喩こそが間違っているかもしれない、と。

定家の歌と時代において、花や紅葉が散ったあとの風景が美しかったのは、むろん、ありし日の花や紅葉も美しかったからである。つまり、この歌は、散る前の花や紅葉を批判している歌では決していない。むしろ、称揚している。

ところが、震災後の今、東北沿岸に残された風景は「秋の夕暮」ではなかったようである。突如として多くの国民が、原発が元気に稼働していた震災前の東北沿岸と日本の姿を批判し、「反原発」「脱原発」運動を実力に訴え始めた。今までの東北沿岸と日本の姿が「花」や「もみぢ」ではなかったことに気づき始めた。

今の国民の反応は、元より「花」や「もみぢ」でなかったものが崩壊すると「秋の夕暮」が残ることもない、ということの皮肉な証明となってしまうのではないか。もしそうならば、今から復興した後の東北の姿は、今度こそ「壊れても美しいもの」でなければならぬ、ということになりはしないだろうか。

三島由紀夫は定家の歌について、「わざわざ花ももみぢも、と言

出してにおいて、それを無いと言い切ったあとで粗末な漁師小屋を付け加えることで、かえって荒れ果てた海岸風景のうちに昔の花と紅葉が脳裏をよぎり、その美がこの歌の真骨頂になる」という趣旨の見解を示している。

三島は、自身のこの見解を「珍解」だと自嘲しているが、実は本心からこの見解を述べただろうと私は見ている。このような美意識による解釈は、今まで多くの日本の文化人が主張している以上、全く珍解とは言えないと思うからだ。

茶の千利休も、この歌には「わび」の本質があると言っている。歌人の塚本邦雄も、この歌について「ありうべき最高の美学は虚無である」と述べている。これらはいずれも、「虚無」の成立には「花」と「もみぢ」が必要であり、「花」と「もみぢ」の成立には「虚無」が必要である、すなわち、「花」や「もみぢ」は「虚無の否定の上」ではなく、「虚無の肯定の内」に存在する、ということを主張したものであった。

だから、このような美意識は、三島が身勝手に生み出した専売特許のような意見ではないし、もしかしたら三島自身もそれを分かっている、わざと皮肉を込めて自嘲したと思われる。

いずれにせよ、このような美意識をもって、藤原定家や三島由紀夫や塚本邦雄は、国内外の学者たちから「耽美主義者」、「退廃主義者」などと言われる。ただしそれは、西洋芸術において、二元論的に「現実主義」や「客観主義」などに対置してランボーやボードレールに貼られたイデオロギーである「デカダンス（退廃派）」を、日

本人に当てはめて見ればそうだ、ということにすぎない。

このような「虚無と退廃のうち」こそ積極的に美を認める「態度は、先述のように子どもや先住民や動物には普遍的にあるものだろうと私は思っている。

私は、日本・東北地方のこれからの真の復興、すなわち「花」や「もみぢ」は、常に現在の「漁師小屋が残る寂れた廃墟的殺風景を目にした虚無感」あつてこそものだと思う。

だから、我々は今後、「東北の荒れ果てた海岸風景の上側」に、それに取って代わる都市や村落を打ち立てるのではなく、「その内側」に、春霞にかすむ桜や秋霧に浮かぶ紅葉のように都市や村落を現出していくべきではないだろうか。今の東北沿岸地域の虚無的風景を脱して復興することばかりを考えない方がよい、というのが私の思いである。

本当に大切なことは、必ずやってくる次回の震災における地元民や地元の動植物の死を「無駄な消滅」にせず「秋の夕暮」的な美に昇華させてしまう「花」を、今からこしらえることではないだろうか。次回の震災時に現出される虚無的風景美の「思い出」としての位置付けに堪えうるような「紅葉」を、今から準備することではないだろうか。

だから、最近の記事にも通じるが、心の基盤はあくまでも「虚無」のほうにあり、『今後の日本史の教科書に書いてほしいこと「東北縄文時代から東日本大震災へ」』の記事にも書いた「東北縄文時代」のほうにあると言える。

この「退廃的風景美からも去りたくないという逆説的自然観」を持っていくことの大切さについて、もっと多くの人と話し合つてみたいと、最近では思っている。それは、宮沢賢治の言葉を借りて、人間の生死と動植物の生死とを差別化しない「センドード」（理想郷仙台）の思想と言い換えてもよいと思う。あるいは、「人間本位の廃墟趣味」を超えた「大自然本位の廃墟趣味」とも言えると思う。

このように宇宙を広く深く見る心がなければ、我々は再びこの東北地方の殺風景を見たくないあまり、これを否定する視点に立つて、突貫工事的な復興を急いであつただけだと思う。

その意味では、先述のような昨今の廃墟ブームは、「退廃美」に身を置こうとしている点においてあと一歩で惜しいところを突いていながら、やはり本当に深い意味では、「人間の不利益（漁師小屋の退廃など）にさえ美を見ることがある姿勢」を少し踏み外しているようにも思える。

そもそも我々は、どの既存の廃墟や荒野に足を踏み入れるときにも、ワクワク感だけでなく、いわば今回の震災での多くの人の死に対するのと同じように、その廃墟の周辺の大自然と動植物・生態系に対しても、畏敬の心が必要であつたと思う。

逆に、震災に遭つて廃墟や荒野と化した今の東北沿岸部の風景に、定家的な「妖艶美・退廃美」や、子どものようなワクワク感、「無邪気な悲嘆のはしやぎ」を感じる心の大切さをも私は思う。

この夏のあとに現出される東北の沿岸地域の「浦の苦屋の秋の夕暮」に虚無の美を見たいと私は思う。私の「不謹慎な」デカダンス

趣味を、三島由紀夫や千利休や塚本邦雄などはあの世で評価してくれるかもしれないと、僭越ながら思ってしまう。

このような視点は、今後東北地方が真に丁寧で美しい「日本的復興」を遂げていくために、とても大切な視点であると私は感じている。「定家の和歌そのもの」を和歌として称揚することにとどまらず、「定家的な自然観」を持って生きること自体が、日本人にとって大切であろうということを思うのである。

■画像出典

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:US\\_Navy\\_110318-N-SB672-598\\_An\\_aerial\\_view\\_of\\_damage\\_to\\_Sukuiso,\\_Japan,\\_a\\_week\\_after\\_a\\_9.0\\_magnitude\\_earthquake\\_and\\_subsequent\\_tsunami\\_devastated\\_th.jpg](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:US_Navy_110318-N-SB672-598_An_aerial_view_of_damage_to_Sukuiso,_Japan,_a_week_after_a_9.0_magnitude_earthquake_and_subsequent_tsunami_devastated_th.jpg)